九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# うごめく欲望、はじける快楽 ： 『金瓶梅』

日下, 翠
九州大学比較社会文化研究院文化空間部門・文化表象講座

https://hdl.handle.net/2324/16089

出版情報：週刊朝日百科 世界の文学. 108, pp.246-249, 2001-08-19. 朝日新聞社
バージョン：
権利関係：朝日新聞社に無断で転載することを禁止する

『金瓶梅』

# うごめく欲望、はじける快楽

「飲み食いとセックスしか書いていない」という批判もあるが、それは日常生活が綿密に描かれていることの証。稀代の淫書は中国初のリアリズム小説でもあった。

◆四大奇書
『金瓶梅』『水滸伝』『西遊記』『三国志演義』の四作品を指す。この呼び方は明代（一三六八～一六四四年）末期に始まった。

四大奇書の筆頭に数えられる『金瓶梅』は、中国小説史の中でも転換点ともいうべき重要な地位を占めている。『水滸伝』（十四世紀中頃完成？）の一つのエピソードから派生していながら、その世界とはまったく異なる物語世界を築き上げたこの作品は、その克明で精彩に満ちた描写からも、中国初の「リアリズム小説」と呼ぶに相応しい輝きと魅力に満ちている。

しかし、その描く内容は意外にも、決して驚天動地、波乱万丈の物語などではない。とりわけ前半は、西門慶の家庭生活を中心に、女たちの葛藤や毎日のように繰り広げられる宴会、官界とのつながり、コネをたよりに出世してゆくありさまなどが描かれる。何のことはない、日常生活そのものである。

そのため、従来から（批判をこめて）『金瓶梅』は「飲食男女を描く」との評が行われてきた。「飲食男女」とは、日常生活の表と裏に他ならない。

## 快楽のバロメーター

『金瓶梅』を語るならば、この「飲食男女」――食と性について触れねばならないだろう。ここに現れた食と性にポイントを絞り、その特質を考えることは、この「稀代の淫書」を理解する上でも、極めて必要な作業なのである。

性の快楽はそれぞれの文化によって異なる。例えば日本人なら、多くの男性は（半ばは自慢して）こういうだろう。「昨晩は五回やった」と。射精の回数が快楽のバロメーターというわけだ。だが、『金瓶梅』を読めばすぐに気が付くことだが、西門慶はおおむね一回の性交で一回の射精しかしない。これは「性豪」には相応しくないかもしれない。

だが、これは中国人なら何も不思議に思わぬことだろう。性の勇者が一回のセックスで一度の射精しかしないというのは当然、どころか、そうでなくてはならないからだ。結論を先に述べておこう。日本人なら射精の回数、中国人なら性交に要した時間（及び、相手を何回いかせたか）が快楽のポイントになる、と。

例として、現代の『金瓶梅』と評判になった賈平凹（か・へいおう）の『廃都』（一九九三年）を挙げよう。主人公荘之蝶は性の衰えに悩んでいるが、その症状は「早漏」である。彼は美女唐宛児（明らかに李瓶児のもじり）と寝た後、性への自信をとりもどし、こう言う。「こんなに保ったのは初めてだよ。牛月清（彼の妻。呉月娘のもじり）とだといつも早いん

⬅『金瓶梅』の挿絵　幾度となく発禁処分を受けながらも隠れたベストセラーであり続けた『金瓶梅』は、明代すでに挿絵入りの豪華本も出版されていた。挿絵本が発禁処分となると次は絵だけを集めた画集が地下出版される。いつの時代も大金をはたいてこれらを買い求める熱心なファンに事欠かなかったのも『金瓶梅』の値打ちであろう。明の崇禎年間（1628～44年）に刊行された『金瓶梅』の挿絵集より。

著作権保護のため
図版削除

著作権保護のため
図版削除

⬅金襴手五彩人形水注　明代中期（16世紀）の景徳鎮窯で作られた水差し。舞う女性の右の袖口が注ぎ口に、左手が把手に、髻がふたになっている。女性の姿態と五彩金襴手の濃艶な趣とがあでやかな美しさを醸し出す。大阪市立東洋陶磁美術館蔵。

著作権保護のため
図版削除

著作権保護のため
図版削除

←「武松打虎」の切手　『金瓶梅』は『水滸伝』の中の西門慶と潘金蓮の「夫殺し」の挿話を元にしている。金蓮に殺された夫武大の弟は、水滸の英雄「虎殺し」の武松である。金蓮は最後に、かつて愛した武松の手に掛かって無残な死を遂げる。哀れにも儚い一生であったが、こののち彼女は芝居や講談で魅力ある悪女の代名詞となる栄誉を担う。平成13年5月23日　郵模第1245号

↓北京故宮の奥向きの部屋　女性はこの中で暮らし、力仕事や取り次ぎは男性機能を失った宦官が行った。夜、皇帝の寝所へ后を連れて行く時は裸にして大衣（マント）で包み、宦官が担いで運んだという。中国映画『西太后』『李蓮英』にはそのシーンがほんの一瞬出てくる。天皇が局に渡る通い婚文化の日本とはシステムが異なる。　写真　柴永文夫

著作権保護のため
図版削除

著作権保護のため
図版削除

↑「武都頭、嫂を殺し兄を祭る」　崇禎刻本『金瓶梅』より。
←京劇『武松殺嫂』　龔蘇萍が演じる潘金蓮。写真　上海古籍出版社(U)

だ。もう男じゃなくなったと思っていたよ」——これが中国人の感覚であろう。

## レイプのない好色小説

このような性文化が成立した一因には、道教の影響が考えられる。古来、性によって精力を強健にすれば仙人になれるという思想があったが、この思想は形をかえつつも脈々と今日に伝えられているのである。古代の「房中術」には射精を抑え、女性をいかせることによって、自分の身体の中に陰の気を取り込み、それによって不老不死になる方法が書かれていた。我が国の貝原益軒のいわゆる「接して漏らさず」もそれが元になっているが、そのルーツを神仙思想と知る人は、案外少ないのではないだろうか。

西門慶の生き方は当時（明代中期）の統治階級のそれである。ここに描かれたものが統治者たる「君子階級」の性であることは注意しておいてよいだろう。『金瓶梅』を始めとする中国の好色小説にはSMやレイプが少ない（西門慶は一度もレイプはしていない）。女性にとって一番不愉快なものがレイプだが、男性の性が征服欲と一体である以上、これが性文学のジャンルで重要なポジションを占めることは容易に想像がつく。

ところが日本や欧米のポルノグラフィーとは異なり、中国のポルノにはレイプものは少ない。だが、それは決して女性への尊敬を示すものではない。儒教社会の中国では、女などは征服するに足る存在でなかったためであろう。特に中国の君子階級にとっては、（実態はともかく）レイプは野蛮であかぬけない、労働者階級の犯罪でしかなかったことだろう。彼らにとって女性は圧倒し征服すべき存在（うっかりすると自分を脅かしかねない性の相手）などではなく、快楽と出産の「道具」であった。その「道具」としての進化の一つが纏足である。この非人間的な風習の人気の秘密は「性の道具」としての役割にあったのである。

## 纏足とは何か？

古来、男色を始めとして基本的に中国に性のタブーは（近親相姦以外は）なかったが、彼らの性にかける執着は、世にもまれな奇習を

著作権保護のため
図版削除

➡道士　1950年代に撮影された「本物の」道士。頭巾をいただき、杖にふくべを提げ、杯を手にする。誰もが道士に対して持つイメージを裏切らない、貴重な写真。ロンドン大学蔵。

➡香港の漫画版『金瓶梅』　アメリカン・コミックの影響の強い香港漫画では、金蓮の肉体はグラマラスな欧米人の如く描かれる。纏足もしていない上に、東洋人には珍しく巨大な「美乳」の持ち主。西門慶は凄みのある美男。なお中国のテレビドラマ『水滸伝』に出てきた西門慶は鹿賀丈史にそっくりであった。中国人のイメージではこのタイプらしい。

著作権保護のため
図版削除

著作権保護のため
図版削除

著作権保護のため
図版削除

⬆漫画『金瓶梅』　ベテランわたなべまさこ（名作『ガラスの城』の作者）の『金瓶梅』は女性の立場からの視点が新鮮。西門慶はハンサムでやさしく、天性の浮気者だが憎めないカワイイ男として描かれる。『源氏物語』もそうであるが、男女の立場を逆転させると読み方がこうも異なるという好例。自分の欲望に正直な「エッチ」大好き美女金蓮も読者の共感を呼びそう。
©わたなべまさこ／双葉社

生み出した。女子の纏足がそれである。中国文化には、日本が取り入れなかったものが幾つかあるが、それらの中でも特に重要なものは、纏足、科挙、宦官であろう。中国では「後宮」に絶対必要であった宦官も、日本には伝わらなかった。そもそも天皇家に中国のような「後宮」というシステムがなかったためでもあろうが、このことと、江戸時代になって将軍家に男子禁制の「大奥」ができたことは、日本文化の特質と変貌という見地からも、もっと注目されてよい事柄であろう。

ここでは、性文化にかかわりの深い纏足を取り上げてみよう。一体、纏足の何がそれほど中国男性の心をとらえたのだろうか。写真を見れば分かることであるが、纏足とは単に足を小さく縛るということではない。親指を伸ばしたまま、残りの四本の指をかるく折り曲げる——これを右手でやってみて、掌を見てほしい。男性ならぴんとくることだろう。要するに人工の性器ができあがるわけである。とりわけ男性は新しい発明品に弱い。車でもパソコンでも、新しい機種が出るとそちらに飛びつく。

「女」も同様、人工の性器が二つ付いた、機能アップバージョン付きニュータイプが出てきたら旧タイプは売れ残るしかないではないか。新しいプレイの可能なこのタイプが大流行したのは当然であろう。無論、それ以外にも理由は考えられる。小さな足は永遠の少女の象徴でもある。華奢な発育不全の下半身が、父系社会のロリコン男性の保護欲をそそったことも人気の一因かもしれない。ともあれ、様々な原因が組みあわさり、纏足文化は延々一千年にもわたり繁栄し続けたのであった。

## ブランデーを水で薄める

よれよれの雑巾でも調理して美味しく食べさせてみせる——これは中華料理のコックの自慢話である。ことほどさように中華料理は味付けを重んじる。それにひきかえ、日本料理は素材の味を重んじるようだ。食と性はよく比べられるが、薬や道具までも総動員し、こってりと味付けを施した『金瓶梅』の性はまさしく中国ならではの性文化といえよう。

空腹だから食べる、欲望に駆られ射精する、それが生命の維持と種の持続につながる——これが動物としてのヒトの基本であろう。しかし、生命を維持する以上の美味を追求したあげく、熊の掌や駱駝のこぶにまでたどりついた中華料理に見られる如く、中国人こそは食と性とを芸術にまで高めた民族であったのである。

中国人は宴会の時、ブランデーを薄めて飲むという（『食事の文明論』石毛直道著、中公新書）。重厚な味が値打ちの酒をわざわざ薄めて飲むというのも理解しにくい話だが、以上の

⬅纏足用の靴　実際に使われていた纏足した足のための靴（成人用）。上海の骨董店で購入。左にある22.5センチの靴と比べると、小ささが際立つ。
写真　堤勝雄

著作権保護のため
図版削除

⬇纏足をした女性　纏足をすると膝から下も未発達のまま、細い棒のようにしかならない。上半身は成熟した女性、下半身は未熟な少女のままというアンバランスが、あどけなさと妖艶さの入り混じった不思議な魅力を醸し出す。まさに人工美の極致である。庭園の奇岩奇木に見られる如く、中国人は独特の美意識を持つ民族であった。
写真　ユニフォト・プレス

著作権保護のため
図版削除

⬅纏足した足　纏足は3～4歳の頃から「手術」が行われる。親指を残した4本の指を内側に折り曲げ、布で包んで糸で縫い付ける。歩くと皮が破れて血膿がにじみ、絶えがたい痛みが半年以上続き、少女は痛さのあまり泣き叫ぶという。すべて付加価値を高めるためであり、少女も成長すると纏足にプライドを持つようになった。
写真　ユニフォト・プレス

著作権保護のため
図版削除

⬇李嵩『骷髏幻戯図』　髑髏の人形を操る髑髏の人形使い。髑髏と乳飲み子の取り合わせは、死と再生という中国人の宇宙観を表すものかもしれない。李嵩は南宋の宮廷画家で、12世紀後半から13世紀半ばにわたり活躍した。北京、故宮博物院蔵。
写真　ユニフォト・プレス

➡傀儡戯　『北京風俗図譜』より、清代の町中で行われた人形芝居。明代には、「説書」と呼ばれた講談とともに、傀儡を操る人形芝居や影絵芝居が人気を博していた。『金瓶梅』には戯曲の影響が色濃い。東北大学附属図書館蔵。

著作権保護のため
図版削除

著作権保護のため
図版削除

著作権保護のため
図版削除

⬅李開先　明代嘉靖期の文人。太常寺少卿（正四品）という高位に上りながら失脚。故郷の山東に帰って莫大な財産を築き、余生をおくる。『金瓶梅』の作者には王世貞等数人の候補者が挙げられるが、その中の最有力候補。彼の書いた戯曲『宝剣記』（水滸の英雄林冲とその妻張氏の団円に至る物語）から多くの曲が『金瓶梅』に引用される。

話を踏まえて共通点を見出すならば、キーワードは「快楽の永続」かもしれない。宗教上の制約が強い民族では、快楽を抑えることが神に近づく道、との考えが普通であるが、神なき国中国では、快楽への絶対的な肯定が見受けられる。食も性も果てしない快楽の永続化を求める――『金瓶梅』に描かれた世界はまさしくこれであろう。

わが国の夏目漱石はこう書いた。「水臭い麦酒を日毎に浴びるより、舌を焼く酒精を半滴味はう方が手間がかゝらぬ」（『幻影の盾』一九〇五年）。これが代表的な日本人の感性であろう。『金瓶梅』はやはりわが国には生まれぬ文学であった。

## 滅びから再生へ

最後に作品中の戯曲の影響について述べておこう。『金瓶梅』には、多くの戯曲的要素が見られる。科白が突然唱になる（西門慶は臨終の場面で突然唱い出す。小説としては異様である）。不必要なギャグを入れる（李瓶児の死の間際、呼ばれた医者が滑稽な科白を延々と語る）。会話のやり取りだけでストーリーを運んでいく、等である。これは作者が戯曲創作に慣れ親しんだ文人であったため、その癖が出たとも考えられるが、「戯曲の影響」という観点は、この物語の最終回を考える上で重要なポイントとなってくる。

『金瓶梅』は、主人公の西門慶を始め、金蓮・李瓶児・春梅、さらには武大、花子虚ら多くの登場人物が血を流し、恨みを呑んで死んでゆくという、全編血まみれのなんとも陰惨な小説である。これらの亡者をそのままにして終わるならば、たたりは必定であろう。

だが、読者もご安心あれ。最終の第百回では、これらの死者の幽霊が一人一人登場し、自ら解怨と転生を述べて退場してゆくのである。この場面に、最終幕に鎮魂と団円がくる「鎮魂劇」の影響を見てとることは、さして不自然なことではないであろう。ここでようやくこの物語は完結し、次の転生の物語へと繋がっていく。これは必要な措置なのだ。滅びから再生へ。これこそ天地が循環すると考える中国人の宇宙観そのものなのである。

『金瓶梅』の物語は、中国人の生と「快楽の永続化」への執着そのままに、登場人物もまた生まれ変わり、さらに続いてゆくのであろう。

（日下　翠）

●貫平凹（一九五三〜）　●貝原益軒（一六三〇〜一七一四）　●夏目漱石（一八六七〜一九一六）

（参考図書）『金瓶梅―天下第一の奇書』（日下翠著、中公新書）

作品紹介

### 『金瓶梅』（十六世紀半ば完成）

『金瓶梅』は『水滸伝』の中の一エピソード、西門慶と潘金蓮の故事をもとにし、原作では武松に殺された二人を、死んだのは別人であったとしてストーリーを続けていく。時代は明の中期のそれを反映している。舞台は山東省清河県。物語は西門慶の死を境に二段に分かれる。前半は、西門慶が金蓮を家に入れた後、次々に女たちや富を手に入れ、さらには官界とも通じて出世してゆく様を縦糸に、日常生活のトラブルや、六人の妻妾たちの葛藤、親戚や役人、取り巻き相手との宴会、季節の行事などが、細かく描かれる。後半は、西門慶が金蓮に淫薬を飲まされ頓死した後（これは金蓮に薬を与えて夫の武大を毒殺させた報いである）、人も物も散りぢりになってゆく有り様と、因果応報の結末が描かれる。題名のもととなった金蓮、李瓶児、春梅等もことごとく死に絶えるが、正妻呉月娘は戦乱の中をかろうじて生き延び、下男の玳安を養子に迎えて西門安とし、安らかな老後を迎える。